

教職教養 教育原理 1 学習指導要領の変遷

【昭和】

戦後 修身科等の停止、教育勅語の失効確認決議 → 教育基本法（1947）・学習指導要領試案
児童の生活経験を重視した教育課程

第1次 S33（1958）高校はS35 法的拘束力を持つ

- ・道徳の時間 新設
- ・系統的な学習を重視

スプートニクショック(1957)

第2次 S43（1968）中学S44 高校S45

- ・教育内容の現代化 → 時代の進展に対応した教育内容の導入

第3次 S52（1977）高校はS53

- ・「知・徳・体」の調和のとれた人間性豊かな児童生徒の育成
- ・ゆとりある教育課程、指導内容の精選

臨時教育審議会（1984）

【平成】

第4次 H1（1989）

- ・小学校低学年で生活科を新設、家庭科の男女必修化（高校）
- ・社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成

第5次 H10（1998）高校はH11

- ・生きる力の育成、総合的な学習の時間を新設、高校で情報科を新設

教育基本法改正（2006）

第6次 H20（2008）

- ・基礎的・基本的な知識技能の習得、言語活動の充実
- ・小学校高学年で外国語活動を新設

いじめ防止対策推進法（2013）

* H27（2015）道徳の教科化「特別の教科 道徳」

第7次 H29（2017）高校はH30 全面実施 小 2020 中 2021 高 2022

- ・資質能力 3つの柱

生きて働く知識技能

未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等

学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等

- ・「社会に開かれた教育課程」の実現
- ・「カリキュラム・マネジメント」 教育課程の編成→評価・改善
- ・「主体的・対話的で深い学び」の実現

* 育成すべき資質・能力を、すべての教科等で統一的に整理

生きる力

確かな学力

豊かな心
健やかな体

教職教養 教育原理 2 カリキュラムと評価

1 カリキュラム

①教科カリキュラム	個々の教科の背後にある学問の論理的体系をもとにし、教科相互の間に関連が考慮されない多教科並列のカリキュラム	教科中心
②相関カリキュラム	教科の区分は残しつつ、学習効果の向上のため、教科の間の相互関連を図ったカリキュラム	
③融合カリキュラム	相関カリキュラムの考え方をさらに進め、一部の教科・科目等を融合し、新しい教科・科目や領域に再編成したカリキュラム	
④広領域カリキュラム	教科の枠組みを取り払い、広範囲の内容を領域ベースで整理したカリキュラム	学習者中心
⑤コアカリキュラム	現実の問題解決を学習する中心となる課程と、それに必要な基礎的な知識や技能を学習する周辺課程からなるカリキュラム	
⑥経験カリキュラム	子供の興味・関心を中心に組織されたカリキュラム	

2 評価

ブルーナー ウッズホール会議議長 「発見学習」

①評価の時期による分類「いつ評価するか」

ブルーム 「教育評価の3類型」(完全習得学習の土台 → 「指導」と「評価」の一体化)

指導前: 診断的評価 指導前の子どもの状態を把握

指導課程: 形成的評価 小テスト等で指導と並行して行う。指導の修正に活用

まとめ: 総括的評価 学期末試験のように一連の指導が終了した時点で行う

②評価の基準による分類「何を基準にするか」

絶対評価 個人の目標への到達度を評価する

相対評価 集団内での比較により評価

個人内評価 よい点や可能性、進歩の状況の評価

③その他の評価

ポートフォリオ評価 学習過程で作成した作品やレポートなどを個人ごとに累積し、その成果を評価する

*「キャリアパスポート」小学校から高校までの記録

ルーブリック評価 観点ごとに、事前に設定した評価基準をもとに評価する。評価前に子どもに対しても共有されていることが望ましい

例 小論文について 構成 A 論理的に組み立て、、、、
B 形式を整えてはいるが、、、
説得力 A 具体的な実践を踏まえ、、、
B 実践を踏まえてはいるが、、、

教職教養 教育原理 3 学習理論

1 連合説

- (1) 古典的条件付け (パブロフ) イヌ えさ → 光、音
- (2) オペラント条件付け (スキナー) 箱の中のネズミ えさ → パー
プログラム学習 4原則
 - ①積極的な反応の原理 ②フィードバックの原理 ③スモールステップの原理
 - ④自己ペースの原理
- (3) 試行錯誤説 (ソーンダイク) 問題箱の中のネコ

2 認知説

- (1) 洞察説 (ケーラー) チンパンジー 餌の場所、道具の種類を洞察
- (2) サイン・ゲシュタルト説 (トールマン) ネズミの迷路実験
- (3) 場の理論 (レヴィン) 行動は、人格と環境の相互作用

3 その他

- (1) 適正処遇交互作用 (クロンバック) 学習者によって適切な教授の仕方は異なる
- (2) 有意味受容学習 (オズベル) 先行オーガナイザー 新しい知識を既知のものに結び付ける効果

4 さまざまな学習法

①イエナプラン (ペーターゼン)

学年別学級を廃止。異年齢の様々な子どもがいる集団の中で教える・教えられる両方の経験をさせる。オランダで盛ん。

②バス学習 (フィリップス)

少人数による話し合い (6-6 討議) を取り入れて授業を展開

③シグソー法 (アロンソン)

ホームグループで役割分担し、同じ役割を担当した者同士でエキスパートグループを組んで学習。その結果をホームグループに持ち寄って協調的に学習を進める。

④KJ法

提唱者の川喜田二郎のイニシャルをとって命名。付箋に書いた考え等をグルーピング等の整理をすることで結果を導き出す。

⑤ブレインストーミング (オズボーン)

集団でアイディアを出し合う。質より量を重視。頭に浮かんだ考えを、是非を問わずにできるだけ多く出す。

⑥構成的グループエンカウンター (国分康孝)

リーダーが意図的に提起するエクササイズをペアや小集団で実施。活動を通して他者/自分と出会い、自己理解、他者理解/受容などを深める。